

家庭生活における世代間の相互作用に関する研究(2)

平田 道憲 岩重 博文 木下 瑞穂
片山 徹之 一ノ瀬孝恵 日浦美智代

はじめに

「高等学校学習指導要領解説 家庭編」によれば、高等学校家庭科の目標は、「家庭生活の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、家庭生活の意義を理解させるとともに、家庭生活及び関連する職業に必要な能力と主体的、実践的な態度を育てる」ことである¹⁾。この目標のうち「家庭生活の意義を理解させる」とは、家庭生活を経営し管理する立場から、家庭生活全般を総合的に把握し、その意義と重要性を理解させ、親の役割や男女が協力して家庭生活を築いていくことへの責任感などを育て、よき家庭人としての自覚をもたせることをねらいとしていることが同書に示されている。

われわれも、ここでいう家庭生活全般を総合的に把握することが家庭科教育において重要であるという認識をもっている。とくに、1989年の改訂で高等学校家庭科において重点をおいて学習すべき内容であるとされた「高齢化社会」あるいは「消費生活」の教材化には、総合的な視点が不可欠である。ところが、家庭科教育の教材は、衣食住、保育、家庭経営というように家庭生活のすべての分野にわたっているものの、それぞれの分野が独立しているため、分野相互の関連が弱く、家庭生活全般を総合的に把握するという目標は達成できていない傾向がある。

われわれは、家庭生活全般を総合的に把握するための教材化を目標として、これまでに、家庭科教育における二つ以上の分野を関連づけるような教材のあり方について検討してきた。

最初の試みは、栄養と運動のバランスからみた健康管理を生徒に理解させるための教材化である²⁾。この研究では、食物摂取状況から栄養面を、生活時間配分から運動面をとらえ、主として栄養学と家庭管理学の分野の総合を検討した。

次の試みは、食生活における世代間の相互作用についての検討である³⁾。食事内容、嗜好といった栄養面と食事の取り方や献立などの世代間の関連について生

徒に考えさせる教材の開発である。高校生の立場からみたとき、高校生の食生活の栄養学的な側面に加えて、両親世代や祖父母世代の食生活とどのように関連しているかを考えさせようとするものである。高齢者の生活という家庭科教育における新しい分野を考えるきっかけともなると考えた。この研究においても、主として栄養学と家庭管理学の分野の総合を対象とした。

食生活における世代間の相互作用の研究経験をとおして、われわれは、このテーマをもう少し広く深く追求することが家庭科教育において重要であると考えた。そこで、本稿においては、家庭科教育における世代間相互作用の考え方について整理することを目的とした。本稿では、はじめに世代間相互作用のとらえ方について検討し、次いで高等学校家庭科における世代間相互作用の取り扱いを分析する。各生活分野別に世代間相互作用の問題点を指摘したあとで、教材化に向けての考え方の一例を示す。

I 世代間相互作用のとらえ方

われわれが、食生活における世代間相互作用の研究を考えたいきっかけは、高齢化社会における食生活の栄養の問題を検討することであった。つまり、高校生が高齢者と同居している場合と同居していない場合とで、食生活に相違があるのかないのか。あるとすれば、その相違は高校生および高齢者にどのような影響を与えているのであろうか。このような問題意識が研究の出发点となっている。

しかしながら、研究の枠組みを考えていく過程において、食生活における世代間の関係は、必ずしも高校生と祖父母世代だけの問題でないことに気がついた。つまり、高校生の食生活は両親世代の影響をも受けている。ふつう、高校生は両親世代と同居しているし、かなりの家庭で母親が調理を担当している。このことから、高校生の食生活が、両親世代、とくに母親の食生活に対する考え方の影響を受けていることはある意味で当然すぎることで、あらためて世代間相互作用と

Michinori Hirata, Hirofumi Iwashige, Mizuho Kinoshita, Tetsuyuki Katayama, Takae Ichinose, and Michiyo Hiura: A Study on the Intergenerational Relations in Family Life (2)

いう考え方をするまでもないかもしれない。しかしながら、この関係はやはり、食生活における世代間の相互作用であろう。

家庭生活における世代間の相互作用は、食生活に限定されるものではない。家庭生活の多くの分野において、世代間相互作用がある。それは、高校生と両親世代、高校生と祖父母世代の相互作用だけでなく、高校生からみた両親世代と祖父母世代との相互作用も含まれる。高校生と祖父母世代との相互作用は、三世代同居の場合、確かに相互作用が大きい傾向にあるとしても、別居の場合でも相互作用がないわけではない。

このように世代間相互作用を考えると、その相互作用のとらえ方として、次の二つを考えることができる。一つは、知識・情報の伝達であり、もう一つは、各世代の生活に与える他世代の影響である。

(1) 知識・情報の伝達

世代間相互作用の一つは、ある世代から他の世代へ知識・情報が伝達されることである。知識・情報の流れとして、祖父母世代から両親世代、祖父母世代から高校生世代、両親世代から高校生世代への流れがある。いわば、上の世代から下の世代への流れである。高校生世代は、自分が生きていくために必要な多くの知識・情報を上の世代から得る。この中には、生活文化の伝承も含まれる。

この生活文化の伝承は、各家庭の日常生活の中でその家庭の生活様式として伝えられる側面と、地域社会や社会全体で受け継がれていく側面とがある。自分の両親や祖父母、あるいはもう少し一般的な両親世代や祖父母世代の人からの聞き取りをもとに、この文化の伝承を教材化している教育実践例も多くある。

世代間の知識・情報の流れは上の世代から下の世代へばかりではない。高校生から両親世代、高校生から祖父母世代、両親世代から祖父母世代へという下の世代から上の世代への流れがある。この流れは、これまでとくに教育の分野においてはあまり重視されてこなかったように思う。学校においても、教師が生徒に知識や情報を伝達する流れとともに生徒が教師に知識や情報を伝達する流れがある。

この下の世代から上の世代への情報の流れは、科学技術の進歩が早くなればなるほど重要性を増すのではないであろうか。これまで、上の世代がもっている知識・情報が下の世代がもっている知識・情報より優位にあると考えられていた。そのことがなくなることはないにしても、情報化社会の進展は下の世代から上の世代に伝えるべき知識・情報の量を多くしている。

(2) 世代間の影響

もう一つの世代間相互作用は、世代間の影響である。三世代同居を例にして考えるとわかりやすいと思う。われわれが考えた食生活の分野において、高校生が高齢者と同居することによって献立が変わるとすれば、それが世代間の影響である。高齢者にあわせた献立になることによって高齢者世代の影響を受けることもあれば、高校生にあわせた献立になることによって高校生世代の影響を受けることもある。

このような世代間の影響は食生活分野に限定されるわけではないし、三世代同居の場合に限定されるわけでもない。家庭生活の多くの分野で相互に影響を与えている。

II 高等学校家庭科における世代間相互作用の取り扱い

現在の高等学校家庭科において世代間の相互作用ということが、いかに取り扱われているかについて検討するために、とくに家庭一般について学習指導要領と教科書の記述を調査した。

(1) 「高等学校学習指導要領解説 家庭編」¹⁾

「はじめに」のところで高等学校家庭科の目標を記載したが、ここで見られる人間関係については、とくに男女の協力ということに重点が置かれている。家庭生活の中心になるのは高校生からみればその父母であり、高校生が自ら結婚し、家庭を持ち、親となった場合には自らが家庭の中心となる。その時にまず重要となる人間関係は配偶者との関係であり、当然男女の協力ということはそのことをさしてあり、適切な目標と思われる。家庭生活を考えれば、子どもと両親との関係も重要になるわけであるが、そのような世代間の関係については、親の役割の重要性の記載があるのみである。

家庭一般の目標を検討してみると人間関係については、男女の協力という視点でしか記載がみられない。

家庭一般の内容は、7項目から構成されているので各項目に従って検討してみる。(1)家族と家庭生活の項目では、家族の役割と人間関係に関する内容において、「家庭生活における家族関係の重要性を理解させ、家族構成と家族が果たす役割について考えさせる。また、家族同士の人間関係を保つための方法について、具体的な事例を通して身に付けさせる。」とある。この部分は、世代間の相互作用について考慮されるべき部分のように思われる。さらにこの項目では、高齢化社会における生活設計の必要性を述べ、高齢者の心身を理解し、高齢者に適切に対応できるようにする、とある。

しかし、高校生が高齢者から受ける影響については記載がない。(2)家庭経済と消費の項目では世代間の関係についての記載は見られない。生活情報の活用に関する項目でも、マスコミ、国民生活センターや消費センターなどからの情報への対応については記載があるが、従来重要であったと思われる高齢者から得られる情報に関する記載は見られない。(3)衣生活の設計と被服製作の項目においては、世代間の関係についての記載は見られない。(4)食生活の設計と調理の項目では、献立と調理に関する内容において、食品群別摂取量の目安を活用して、青少年、成人、老人、幼児の栄養を考慮し、家族の実態に即した献立を作成させる、という記述がある。(5)住生活の設計と住居の管理の項目では、具体的に世代間の関係についての記述はないが、家族形態を理解することの重要性が述べられている。(6)乳幼児の保育と親の役割の項目では、親の役割の重要性と子どもに対する親の影響の大きさが述べられているが、子どもから親へへの影響や子どもに対する老人の影響については記載されていない。(7)ホームプロジェクトの実践と学校家庭クラブ活動の項目には世代間の関係についての記載は見られない。

(2) 「家庭一般」の教科書⁴⁾

次に具体的に「家庭一般」の教科書において、世代間相互作用についていかなる記述がなされているのかを検討する。ここでは一橋出版の教科書を用いる。本教科書は5章から構成されているので各章ごとに検討を加える。

第1章家庭生活は、指導要領では(1)および(2)に相当するものと思われる。ここで述べられている人間関係で強調されているのは、夫婦の関係(ヨコの人間関係)である。このことは、指導要領と一致している。しかし、ここで注目すべきことは世代間の関係(タテの人間関係)については、明治民法による男性のあととりを中心とした親子関係の説明に限定されており、よい印象を与えていない。したがって、夫と妻すなわち男女の自立と連帯に基づく新しい家庭生活をよしとし、ヨコの関係が重視されている。一方で、親と子の関係については、子は親の決定に従うのが原則とし、相互の関係というものは読み取れない。また、祖父母と家族の関係については、今日においても我が国では三世同居の割合が、欧米諸国と比較し多いことを述べている。また、高齢者にとって同居が、精神的にも経済的にも支えになり、また、家族にとっても高齢者の知恵や経験は重要であるとしている。しかし、一方で嫁姑問題や世代間の葛藤があり、スープのさめない距離に住むこともひとつの方法であるとしている。さらに、

生活文化の伝承については、主に親と子の関係の中で、家事労働を対象に述べられており、祖父母との関係は見られない。また、高齢者との関係については、高齢化社会との関連で高齢者を理解、認識するという面が強調され、その反対の影響についてはほとんど記述がない。

第2章母性・父性と保育は、指導要領の(6)の項目に相当する。指導要領に一致して、いかに子を理解し、育てるかという内容である。世代間の関係としては、子から受ける影響や高齢者との関係はほとんどふれられていない。やはり、夫と妻のヨコの関係の重要性のみが述べられている。

第3章食生活では、指導要領に基づき家族構成員の各世代ごとの生理的状態を把握して、献立を考えるべきであるという記述があるが、そこで生じるであろう葛藤については記載がない。また、世代間の関係として重要と思われる食文化の伝承については、とだえる傾向にあることが記述されている。

第4章衣生活では、乳幼児や高齢者の衣服についての特徴が記載されている。また、文化の伝承というよりは、個性の表現としての衣生活が重視されている。

第5章住居の成り立ちとその推移においては、世代間の人間関係に関連した記述として、住居の機能の内容のところで、家族が休息、団らんし、育児や教育、高齢者の介護などを行い、精神的な満足を与えること、とある。

指導要領および教科書を検討して、家庭科における人間関係の扱いが、主として夫と妻すなわち男女の関係(ヨコの関係)であることが理解された。また、この関係が平等であるということが強調されている。このことは、家庭の核となるのは子や高齢者よりむしろ夫と妻であると考えれば当然といえよう。世代間の相互作用すなわち高齢者などとのタテの関係については、むしろ消極的な印象を受けた。その背景には封建制度のもとでの悪しきタテの関係の印象があるからであろう。さらに、夫と妻が子や高齢者から受けるであろう影響などについては、ほとんど考えられていないように思われた。

III 家庭科教育の各分野別にみた世代間相互作用の問題点

ここでは、家庭科教育における各分野別に、世代間相互作用の問題点を整理しておきたい。

(1)食物分野

1)現状について

現代の我が国は、いまだ経験したことの少ない高齢化

社会を迎えようとしている。この現状に対応して食物分野においても高齢者の栄養や生理についての研究が多くみられる。また、経済的に裕福になった我が国において、これら高齢者に適した食物を提供することはそれほど困難ではないであろう。このような状況は高齢者に限らず、幼児、青少年および成人の各世代についても言えるであろう。このような研究はさらに詳細に検討されつつある。

一方、我々の食生活は、通常、各世代別に食事をするというわけではなく、異なる世代の者が同時に同様な食物を食べるのが普通であろう。当然、各世代によって食に対する嗜好、栄養素要求量および生理の状態は異なっているわけである。一般的に高齢者はあっさりとした和風食を好み、若い世代は脂っこい洋食を好むことはだれもが知っているであろう。また、実際に家庭科においても調理の内容において、各世代の特徴を知り、家族構成に合わせた献立づくりを考慮させている。しかしながら、食に対する嗜好、栄養素要求量および生理の状態などの異なっている世代が満足できる食事が容易に調理できるのであろうか。家庭生活においては、よく姑と嫁の関係の困難さが言われたり、最近では社会構造の複雑さも相まって、親子の関係についても様々な問題が指摘されている。食生活においても当然このような世代間の葛藤が考えられるわけであるが、そのような問題を中心テーマとして取り上げた研究や情報は少ない。何かほかの食生活に関する課題に着目した研究の中で世代間の影響が調べられている程度である。

高齢化社会を迎え高齢者の食生活について考慮していく場合に重要なことは、高齢者自身の嗜好、栄養素要求量および生理の状態を認識することはもちろんであるが、若い世代と食を共にする時にいかなる影響を受けるのかということである。また、若い世代にいかなる影響を与えるのかということである。食生活とは、食物と人との相互作用と考えられるため、これまで各世代の人間と食物との関係で食生活はとらえられてきたといえよう。今日の我が国のように、食物が自由に手にはいるような環境においては、とくに、食における世代間の相互作用という視点が重要になり、また、現実的な問題となってくるように思われる。

2) 食生活における世代間相互作用研究の問題点

食生活における世代間の相互作用とは、言うまでもなく食生活をとおしての異なる世代間の人間どうしの関係である。このような視点で食生活を考えていく場合に問題となってくるのが、その学問的範囲の広さである。食物分野はもちろんのこと、家庭管理学、児童保健学、心理学などの分野が関係してくる。居住とい

うことを考慮にいれると住居学分野も関係してくるであろう。このことは、食生活ばかりでなく人間の生活に関する事象が現実的な観点から問題を掘り起こしてきた場合に、いかに各論的な考え方ではなく総合的な見方でなければ解決されえないかということを示しているように思われる。食生活ばかりでなく人間生活における問題を検討していく場合には、各分野の総合化ということも重要になるのかもしれない。

次に、世代間の相互作用という問題を考えていく上での問題はその多様性である。祖父母と孫の食生活における関係といっても一様でないのは明白である。これは、高齢者の食生活を食物との関係で考慮していく場合に、高齢者の有り様が一律でないという事実と比較して、比べ物にならないほど、複雑で、多様で、普遍性に乏しい関係であると言えよう。このような関係の中から何らかの真実を導き出すことは容易ではないであろう。しかしながら、このような関係の中にもまた、ある共通した真実が存在しているのも事実であるように思われる。そしてこのような研究対象には、正確さや精度といった考え方ではなく、おおまかさやアバウトな思考ということが重要になってくるのではなからうか。おおまかさやアバウトな思考もまた、人間生活に関する実践的研究において重要となるように思われる。

3) 世代間相互作用と男女間相互作用

家庭内における世代間の人間関係をタテの関係として見れば、男女間の人間関係すなわち夫と妻の関係はヨコの関係として考えられる。同じ世代の男女についても、嗜好、栄養素要求量および生理の状態は異なっている。また、相互関係についての研究よりも男女それぞれと食物との関係についての研究が多いように思われる。しかし、夫などは一般的に妻と同居の場合の方が単身赴任などの場合よりも食生活は好ましくなるような結果が多い。妻の場合においても夫と共に暮らすことにより食生活に、不満を覚える例は少ないのではなからうか。いずれにせよ、食物分野における世代間の相互作用について検討する場合に、男女間の関係もひとつの参考になるように思われる。

(2) 住居分野

住生活における世代間の問題点について検討するにあたり、日本の住まいの変遷と家族関係について考察する必要があると考えられる。これは日本の家族制度と住空間の利用法とが深いかわりをもっていると推察されるためである。その中に三世代家族や核家族の住まい方が十分包含されていると思われる。

1) 日本の住居内における起居様式について

一般的に言われていることであるが、江戸時代までは畳や板の床に直接座る「床座」であったが、明治時代にはいりテーブルや椅子を使う「いす座」が日本に導入された。しかし、いす座は役所、学校、軍隊、会社などに積極的に採用され家庭内での使用はきわめて限られたものであった。明治時代後期より玄関の近くに応接間や書斎をつくり、テーブル、椅子、ソファなどを使う住居がみられるようになった。これを和洋折衷住宅と呼んでいるが、住居内の他の部分におけるいす座はほとんど見あたらない。このいす座が欧米や中国と異なる点は玄関で靴を脱ぐいす座であり、その後の日本の住居のいす座を形づくるもととなった。ここで注目すべき点は、その当時のいす座の空間は接客を目的としたものであるため、使用主体は家の主人および客であり、子どもや女性など家族一般のものではなく、封建時代の家族制度をそのまま継承しているといえる。その後、家族全員の憩いの場としての居間にいす座が採用されるようになったのは昭和30年代である。

2) 食事室と台所の位置関係および家族について

調理する部屋（キッチンまたは台所）と食事する部屋（ダイニング、食事室、茶の間（または台所と呼ぶ地方もある））を分離することは住居が複数の部屋をもつようになった段階ですでに始まっている。しかも、洋の東西をとわず分離されていることをみると、煙、臭いや雑事をみることなく食事することの大切さを感じていたようである。これら2室は近くに位置するほど機能的であり、そのように計画することが望まれた。しかしながら、台所から離れた部屋で家族が食事をするためには、それらをサービス（給仕）する人が必要である。これを可能にしていた人は、現代ですでに聞かれなくなったが、召使いや女中と呼ばれた人たちである。そのような人が得られなくなった現在、同じように2部屋を維持しようとするれば、三世代家族および核家族をとわずその家事作業は主婦の仕事となるであろう。その家事労働を軽減する解決法の1つが、昭和30年以降急増するダイニングキッチンである。これは上述する2室を結合した部屋である。

食事をサービスする人手について、いま一度検討してみたい。日本料理の場合、同時に数多くの皿が卓上にならぶ空間展開型であり視覚的にもきわめて美しい。一方西洋料理の場合は、一皿ずつ運ばれては食べる時系列型である。このため西洋料理においてサービスにより多くの人手を必要とし、これらが家事労働を負担の重いものにし、夫の家事への参加を早めた一因とも考えられる。

3) 食事室の起居様式と食卓の変遷について

食事室の起居様式についても、やはり床座といす座

に分けて考えるべきである。食事をする茶の間よりも調理をする台所において、いす座が早く実現している点にも注目したい。江戸時代はもちろんのこと明治に入っても、茶碗などを洗う流しは、床に座る「座り流し」が主流であったが、明治時代後期よりコンクリートなどで作られた「立ち流し」（文化流しとも呼ばれた）が採用されるようになった。このため主婦の家事労働は徐々にではあるが床座から立式（いす座）へと変化し、労働の軽減が計られるようになった。

食事をする部屋は茶の間（あるいは台所）と呼ばれる部屋で、座って食事する床座が長く続いた。その部屋も江戸時代から明治時代にかけては板の間の場合が多い。その後、明治時代後期より徐々に畳の敷かれた茶の間で食事するようになった。このような床座の食事が長く続き昭和20年の敗戦とともに大きな変化が訪れた。そして、昭和30年頃よりダイニングキッチンが急速に普及しはじめ、テーブルと椅子を使ういす座の食事が始まった。

床座で食事をする場合は、最初のうち銘々膳（箱膳）と呼ばれる一人用の小さな食卓を各自が用いた。とくに住み込みの使用人をもつ商家では、一人分の配給をするのに好都合でありよく使われた。しかし、このような銘々膳では家族の団らんはなかなか生まれない。明治時代後期より家族全員が同じ食卓に座って食べるチャブ台を使うようになった。ここでは、三世代の人が同じ食卓で同じ内容のものを食べるようになったが、きちんと正座して食事をするため、家族全員が会話を楽しみながら食事するまでには至らなかった。チャブ台は直径1m程度であり、そこへ家族全員が座ることはかなりきゅうくつであるが、食事室は小さくてもよいというメリットがあった。

昭和30年頃からのダイニングキッチンの普及にともない、ダイニングテーブルと椅子を使用したいす座の食事が始まり、あわせて食寝分離も可能になった。現在の我々の食事形式はかなり選択肢が多い、ダイニングテーブルを使用することについては三世代にわたってならぬ不都合はなく、むしろ車椅子を使用しなければならぬ高齢者にとってはいす座は不可欠である。食事形式の例をあげてみると、夏はダイニングテーブルで食事するが、冬はとなりの和室の座卓（電気こたつ）で食事する。また、朝食はダイニングテーブルで取るが、夕食は座卓でのんびりするなど家族の団らんと家庭の民主化が世代を越えてかなり実現しているように思える。

4) 食事空間の使用主体と席順について

古い家族制度の影響を残していた段階においては、食事室の着席順もあきらかにみられた。台所に近い下

座と入口から離れた上座を空間的に構成し、上座には家の主人が座り、下座には食事をサービスする主婦が座った。しかし、この着席順は家族の多くが家事（食事サービス）に参加するとの考え方およびテレビの出現により現在ではなくなっているといえる。むしろ、テレビを見るための食事室空間構成が多くみられ、現在ではテレビのよく見える位置がよい席とされている。また、夫婦共働きの三世代家族を例にあげ食事の話題について検討してみる。多くの家庭が子ども中心に経営されているため、話題の中心はまず子どもの「学校のこと、クラブや友人のこと」、そして昼間の留守を頼んだ祖父母からの「昼間の出来事」などであり、その他はテレビを中心とした話題であろう。このように現在の食事空間の主体は子どもおよび祖父母と考えられる。

5) 食事空間のもつ意味について

我々が限りある食物を共に分かちあい一緒に食べて生活する最小単位が家族であり、そのための安全な生活を営める空間が住居である。人が一人立ちできるまで養育（保護）すること、および働けなくなった後は家族が生活を保証することこそが三世代住居の起源である。これらは現在、経済的側面および医療的側面より色々な施策がとられているが、住まいの確保は精神的側面においても大きな安らぎを与えていると考えられる。今日の食生活においては、ファミリーレストランやファーストフードが発達して多くの家族が利用しているが、これは社会の一傾向であって家庭で食事をしなくなるとの意味ではない。したがって食事空間が我々の家庭からなくなることはなく、家族の生活は永遠に続くであろう。

(3) 家庭経営分野

家庭経営分野における世代間相互作用を考える場合、各世代、とくに祖父母世代の状況によってさまざまな考え方がある。祖父母の健康状態、同居別居の別などにより、相互作用の考え方が異なるからである。

ここでは、ある程度健康な祖父母との相互作用を同居と別居とに分けて考えてみたい。

1) 同居の場合

同居の場合、祖父母世代と両親世代の家庭経営が基本的に一つの家族としてなされているか、あるいは別の家族としてなされているかによって、世代間の関係が異なってくる。同居といっても、極端な場合は、物理的には同じ建物に居住していても、祖父母世代と両親世代が玄関も別で、あたかも別々に暮らしているようなケースも考え得る。玄関が同じであっても、家計、家事労働などについて、様々な形態がある。ここには、

玄関の共有だけでなく、台所やリビングルームなどの共有あるいは独立使用など、住居分野の問題とも関連する点が多い。

祖父母世代あるいは両親世代のどちらか一方が家計から家事労働まですべてを担当する場合がある。この場合、両親世代が担当し祖父母世代が世話を受ける側にまわることが多いけれども、祖父母世代がすべてを仕切る場合もある。

この中間に、祖父母世代と両親世代が協力あるいは分担して家庭経営をする形がある。家計および家事労働の分担には、就労形態が関係することが多い。祖父母の両方あるいはいずれかが就労しているかどうか、両親の両方あるいはいずれかが就労しているかどうかによって、協力分担の形も影響を受ける。母親が就労し、家事労働を祖母が単独で担当あるいは母親と協力して担当するケースはよくみられるものである。

もちろん、同居における協力や分担は問題なく行われるとは限らない。両親世代と祖父母世代との葛藤が生じる場合も多い。嫁姑問題はその典型である。

高校生世代は一般に家庭経営という視点で生活することが少ないが、実際には、その家庭の家庭経営の中で自分の分担を実行している。もっとも、家庭経営にほとんど関わらない高校生もいる。

世代間の影響としては、両親および同居の祖父母から正負両方のものを受けている。とくに、祖父母世代と同居することによって、生活の多くの分野で祖父母の影響を直接受け、あるいは祖父母に直接の影響を与えている。上で、食事の献立を例にあげたが、日々のしつけ、テレビ番組などの余暇活動、消費活動（何を購入するかなど）などにおいて、相互に影響しあっている。このほか、両親世代と祖父母世代の協力や葛藤をそばで経験することも、三世代同居の高校生からみた世代間相互作用の一つである。

2) 別居の場合

別居の場合であっても、いわゆる「スーパのさめな距離」に祖父母世代が住んでいる場合は、同居と同じような両親世代との協力あるいは分担がみられる場合もある。

しかしながら、一般的には、高校生の日常生活においての世代間相互作用は、主として両親世代との間で生じることになる。高校生が、高齢者にあわせた味付けの食事をするということは別居の場合ほとんどない。祖父母とのチャンネル争いを経験することもない。

別居の場合、祖父母世代との相互作用は、非日常的に生じる。贈り物の交換、電話や手紙、相互訪問によるコミュニケーションなどが中心となる。日常的な影響は小さくなるが、知識・情報の伝達という側面にお

いて影響を受ける。両親世代と祖父母世代の協力や葛藤に接する機会が少ないことも別居の場合の特徴である。

(4) 日常生活における消費財、電気・電子製品等の利用の分野

現在の家庭生活においては、日々新しい製品が入り込んできており、我々は否応なくその中で生活せざるを得ない環境となっている。新しい製品と一口にいても様々なものがあるが、概念的に分ければ、新しい素材(材料)を用いたもの、従来の製品に対しマイクロプロセッサ、各種センサーなど電子技術を駆使して機能を強化したもの、今までにない機能を実現したもの、技術は従来のものを用いているが新しいアイデアをとり入れた製品などとなろうか。実際の製品は、これらのどれか一つに分類されるというものもあろうが一般的にはこれらが複合されたものであろう。またこれらの中には、その存在によってライフスタイルも変化してしまうようなものもある。

このような製品の利用における世代間相互作用の形としては、上の世代(祖父母や両親)から下の世代(高校生)への知識・情報の伝達とともに下の世代から上の世代への知識・情報の伝達がある。しかしながら、このような世代間の相互作用については、家庭科教育のみならずほとんど研究が進んでいない。ここでは、世代間相互作用の問題というよりも、家庭科教育のもう少し一般的な視点から検討してみたい。

はじめに述べたような新しいものが生活環境に入ってきたときの問題として、その製品の操作・使用法の問題、その使用による環境への影響、廃棄・リサイクルの問題などが考えられる。

操作・使用法が難しいといった問題は、その製品の技術が成熟するにつれて解決されると考えられる。現在家庭にコンピュータが徐々に普及しつつあるものやはり使い方が難しいといった声が大きいようであるが、コンピュータ技術がまだ未成熟であることが一因であろう。しかしコンピュータの場合コンピュータに何をさせるか、またはコンピュータで何をするかで、その見方は大きく違う。例えばゲームをするというのであればコンピュータゲームは現在確固とした地位を獲得しており、操作云々といったことは問題とはならない。コンピュータでワープロや表計算などの情報を操作する作業をしたり、ネットワークを通じて何かしようとするれば、人間が情報を与えたり、情報を受け取ることが必要であるので、テレビにチャンネルの情報や音声のボリュームの情報を与えるのとは少し状況が違うと考えられる。

ある製品を使用しなくなったとき、または廃棄しようとしたときに、消費者はどのように処理すればよいかということに関しては、分かりやすいマニュアルを添付する、回収システムをつくるなど製造者の責任が重要である。家電製品などは消費者の手の出しようがないものも多い。しかし消費者側もマニュアルやメーカーの指示通りに処理すると同時に、その物に対する基本的な知識をもっておくことが必要なのではないかと考える。

新しい素材というわけではないが、日常使われる消費財の一例として、食品をラップするフィルムを考えてみよう。ラップフィルムには現在主にポリ塩化ビニリデン(PVDC)ポリ塩化ビニル(PVC)、PVDCとPVCの共重合体、ポリエチレンなどが使われている。PVDC、PVCは現在ゴミの焼却で問題となっているダイオキシンの発生の原因である塩素を多量に含んでいるので、ゴミとして廃棄するときにはかなり注意を要するはずであるが、実際にはスーパーで買い物を入れるポリエチレンの袋との違いを意識しているひとは少ないのではないかと。

日常生活の中である製品を使用するとき、その製品の動作の仕組みや原理などを意識して使うことはない。意識しないと使えないようであれば、家庭生活で使う製品としては多分失格であるし、仕組みや原理を知らなくとも安全に使えるということが原則である。しかしながら安全かどうかの基準も完全なものである保証はないし、その製品や装置を使用すれば、原理的にこれこれのことがあり得るといようなことは知っておくべきであろう。

いわゆるハイテクによって生み出されたもの、それ自身がハイテク機能をもっているものなどもあるが、素人には難しいから知らなくてよいというようなことはない。技術的なことはさておき、原理的なことは理解するべきである。とはいえ我々の身のまわりには、素性のしれないものが多すぎるように思う。食材にしても、どこでどのようにして栽培された野菜なのか、どこの海で獲れたまたはどのようにして養殖された魚介類なのか、さっぱりわからないし、衣料にしてもポリエステルやナイロンらしいが、どのような技術を用いて作られたものなのかかわからない、住環境を形作る建材もどこの材木なのか場合によっては材料そのものが何なのかよくわからないこともある。

知る必要性がない、知らせられないという理由で、'知らない'ことが非常に多くの危険性を含んでいるのではないかと考える。技術の発展速度があまりにも速く、容易なことではないかもしれないが何らかの形で使う側への教育をする必要性があるものと考えられる。

IV 世代間相互作用の教材化の考え方

各生活分野別に世代間相互作用の問題点を検討してきた。その問題点から、世代間相互作用を題材として、複数の分野を総合する教材を考えていくことができる。そのような教材はいくつか考えることができると思うが、ここでは、世代間相互作用としての「団らん」の教材化について検討してみたい。

「団らん」の形は時代、地域、家族形態によって異なるものであるが、「家族成員の全部あるいは一部が集まり、食事、会話、テレビ視聴、余暇活動などをする」と定義しておくことにする。

三世代居住の場合、高校生およびそのきょうだいの世代、両親世代、祖父母世代が集まって交流する場となるし、核家族の場合は、高校生世代と両親世代の交流の場となる。この「団らん」を家庭科教育の視点からとらえると、複数の分野と関連し、家庭生活を総合的に把握するための教材となりうる可能性をもつと思う。しかしながら、「団らん」は家庭科教科書においても十分に扱われているとはいえない。

「団らん」を、家庭科教育の各分野との関連でとらえると、次のようにまとめることができる。

食物分野との関連においては、団らんの中心的行動の一つである食事のあり方と結びつけて考えることができる。共食という文化は人間独自のものであるが、家族団らんにおける共食はその典型である。同じ時間に同じ献立の食事を家族全員で食べるというスタイルを団らんの一つの典型としたとき、現在の高校生の食事はどのようなものであるか。この関心のいくつかについては、食生活における世代間の相互作用の研究においてとりあつかった。共食の栄養学的な特徴、つまり、家族と一緒に食べる食事と一人で食べる食事が栄養学的にみてどのような相違があるかなどは、今後研究すべき課題であるかもしれない。

団らは、住居分野とも密接に関連する。団らを提供する具体的な場所は住居の中に用意されていなければならないからである。住居の中に団らんのための部屋をどのように用意するか、一方で家族成員一人一人のプライバシーをどのように確保するかは住居分野の重要な課題である。

家庭経営分野の視点から団らんととらえると、第一に、団らんと可能にする家族成員の共時化の問題がある。いわゆる時間あわせの問題である。子どもが高校生になると、核家族であれ、三世代居住であれ、家族成員全員の時間を合わせることは相当困難になる。住居分野において、団らんのための部屋を確保したとしても、家庭経営分野における時間あわせがうまくいかなければ、団らは成立しない。一緒に食事をするこ

とも一緒にテレビを見ることも不可能である。第二に、時間あわせがうまくいったとして、どのように団らんと過ごすかという問題がある。家族成員全員で時間と空間を共有するための吸引力は何か。食事は吸引力の中心となると思うが、その他の活動は何か。とくに高校生世代の個人志向は、食事中もあまり会話をせず、食後は自分の部屋に引きこもるような生活スタイルと結びつくかもしれない。自分の部屋にテレビがあれば、テレビも一人で自分の好きな番組を見ることになるかもしれない。電話も携帯電話で自室から。これでは、ほとんど団らが成立する余地がない。

家族全員がみんなで食卓を囲み、食後も楽しく談笑するというような絵に描いたような団らんとを今の高校生世代全員に求めることは無理かもしれない。しかし、世代間相互作用の具体的な実現の場として団らは重要な位置を占めると思う。家庭科教育における複数分野の総合を目指す教材化として団らんとを取り上げることが十分意味があるのではない。

団らんのほかにも、世代間相互作用を題材に、家庭生活を総合的に把握するための教材の候補はあると思う。そのような教材を考え、授業実践と結びつけることが、本研究が今後目標とする方向である。

引用文献

- 1) 文部省「高等学校指導要領解説 家庭編」, 実教出版, 1989年
- 2) 平田道憲, 岩重博文, 木下瑞穂, 片山徹之, 鳥井葉子, 日浦美智代, 「家庭生活における栄養・運動バランスの評価に関する研究」, 『広島大学教育学部 学部附属共同研究体制研究紀要』第23号, 123-132頁, 1995年
- 3) 平田道憲, 岩重博文, 木下瑞穂, 片山徹之, 一ノ瀬孝恵, 日浦美智代, 「家庭生活における世代間の相互作用に関する研究」, 『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』第25号, 145-153頁, 1997年
- 4) 一番ヶ瀬康子, 村田泰彦編, 『家庭一般』一橋出版, 1991年

参考文献

- 1) 石毛直道, 「家族と食卓」, 『家庭科学研究』第39巻, 第1号, 1997年
- 2) 稲葉, 中山『日本人のすまい』彰国社, 1984年